

2022年の『ユリシーズ』—スティーヴンズの読書会

第16回 エウマイオス（第16挿話） 2022年2月27日（日）@オンライン

13:30~13:40 ご挨拶

13:40~15:00 第1部 主催者発表

- (1) 読めない『ユリシーズ』の読み方（南谷）
- (2) 第16挿話のあらすじ（小林）
- (3) 特殊にして特殊ではない文体（南谷）
- (4) 嘘をつく言葉と嘘をつく名前（小林）
- (5) 食品偽装と混ぜもの問題（adulteration）について（南谷）

15:00~15:15 休憩

15:15~16:20 第2部 ブレイクアウトルーム+フロアディスカッション

16:20~16:35 休憩

16:30~17:30 第3部 フロアディスカッション+テーマパネル作成

17:40~19:00 懇親会

※丸谷才一他訳『ユリシーズ』（集英社）を引用する場合には「U-△ 挿話番号.ページ数」と、柳瀬訳（河出書房）を引用する場合には、「U-Y挿話番号.ページ数」で表記します。

Ceci n'est pas une pipe.

2022年の『ユリシーズ』ースティーヴンズの読書会 スケジュール

16:35まで休憩とします。

2022年の『ユリシーズ』ースティーヴンズの読書会 スケジュール

第1回 2019年6月16日	第4挿話 カリュプソー	Book II. Odyssey	initial style
第2回 2019年8月25日	第1挿話 テレマコス	Book I. Telemachia	initial style
第3回 2019年10月20日	第2挿話 ネストール	Book I. Telemachia	initial style
第4回 2019年12月22日	第3挿話 プロテウス	Book I. Telemachia	initial style
第5回 2020年2月9日	第5挿話 食蓮人たち	Book II. Odyssey	initial style
特別回 2020年4月26日	特別回 第1挿話～第5挿話	Book II. Odyssey	initial style
第6回 2020年6月28日	第6挿話 ハデス	Book II. Odyssey	initial style
第7回 2020年8月23日	第7挿話 アイオロス	Book II. Odyssey	initial style
第8回 2020年10月25日	第8挿話 ライストリュゴネス族	Book II. Odyssey	initial style
第9回 2020年12月6日	第9挿話 スキュレとカリュブデイス	Book II. Odyssey	initial style
第10回 2021年2月21日	第10挿話 さまよう岩々	Book II. Odyssey	initial style
第11回 2021年4月25日	第11挿話 セイレーン	Book II. Odyssey	
第12回 2021年6月27日	第12挿話 キュクロプス	Book II. Odyssey	
第13回 2021年8月22日	第13挿話 ナウシカア	Book II. Odyssey	
第14回 2021年10月24日	第14挿話 太陽神の牛	Book II. Odyssey	
第15回 2021年12月26日	第15挿話 キルケ	Book II. Odyssey	
第16回 2022年2月27日	第16挿話 エウマイオス	Book III. Nostos	
第17回 2022年4月24日	第17挿話 イタケ	Book III. Nostos	
第18回 2022年6月??日	第18挿話 ペネロペイア	Book III. Nostos	

2022年の『ユリシーズ』ースティーヴンズの読書会 スケジュール

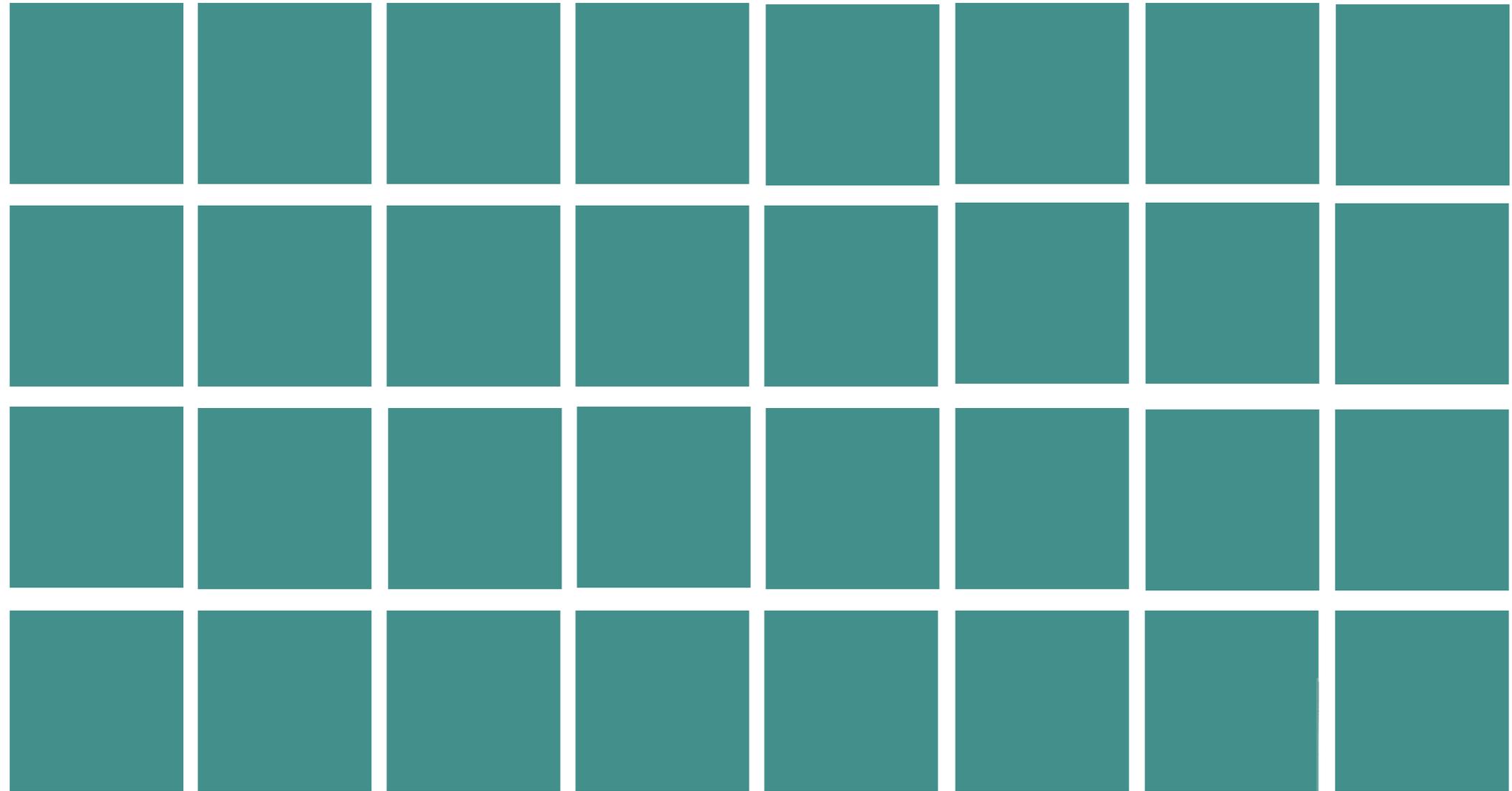
STEPHENS
WORKSHOP
/// Critical Directory of Joyce & Irish Studies



第1回 2019年6月16日	第4挿話
第2回 2019年8月25日	第1挿話
第3回 2019年10月20日	第2挿話
第4回 2019年12月22日	第3挿話
第5回 2020年2月9日	第5挿話
特別回 2020年4月26日	特別回
第6回 2020年6月28日	第6挿話
第7回 2020年8月23日	第7挿話
第8回 2020年10月25日	第8挿話
第9回 2020年12月6日	第9挿話
第10回 2021年2月21日	第10挿話
第11回 2021年4月25日	第11挿話
第12回 2021年6月27日	第12挿話
第13回 2021年8月22日	第13挿話
第14回 2021年10月24日	第14挿話
第15回 2021年12月26日	第15挿話
第16回 2022年2月27日	第16挿話
第17回 2022年4月24日	第17挿話
第18回 2022年6月??日	第18挿話

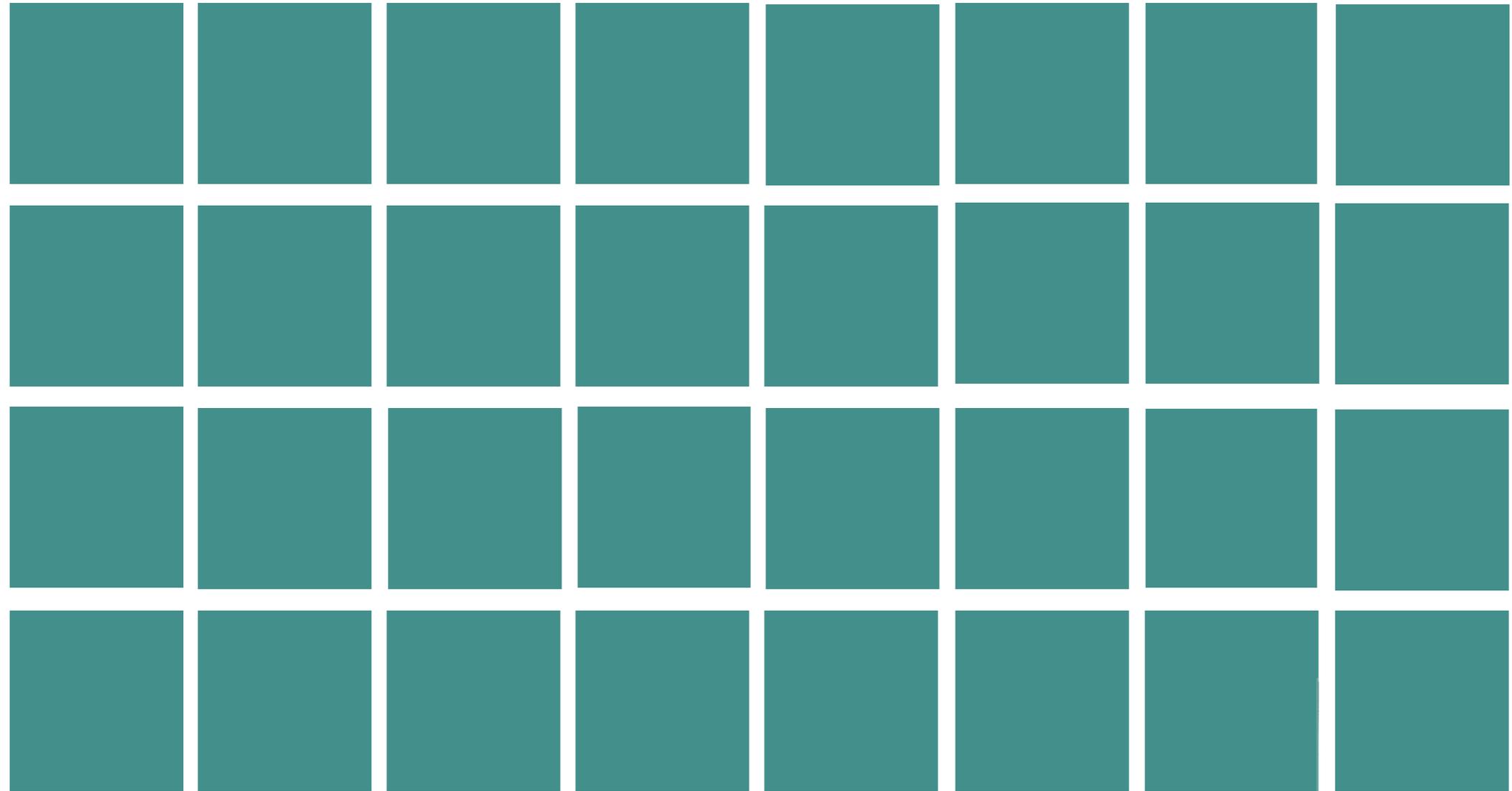
2022年2月2日	特別企画
2022年2月18日	第1挿話
2022年3月4日	第2挿話
2022年3月18日	第3挿話
2022年4月1日	第4挿話
2022年4月15日	第5挿話
2022年5月6日	第6挿話
2022年5月20日	第7挿話
2022年6月3日	第8挿話
2022年6月17日	第9挿話
2022年7月1日	第10挿話
2022年7月15日	第11挿話
2022年8月5日	第12挿話
2022年8月19日	第13挿話
2022年9月2日	第14挿話
2022年9月16日	第15挿話
2022年10月7日	第16挿話
2022年10月21日	第17挿話
2022年11月4日	第18挿話
2022年11月18日	特別企画
2022年12月2日	特別企画
2022年12月16日	特別企画

Episode 1: Telemachus



“ふんぞり返って、ふくらかなバック・マリガンが階段のてっぺんへ現れた。捧げ持つ石罎の泡立つ丸い器にのせて、手鏡とカミソリが十文字に...”
(U-Y 1. 11)

Episode 2: Nestor



“—さあ、コクラン、なんという市が遣いを送った？” “—タレントウムです。”
“よろしい。それで？” “—戦争になりました。” “よろしい。どこで？” (U-Y 2. 49)

Episode 3: Proteus

海	波	砂	貝	風	浜	潮	浜
馬	犬	女	男	馬	鷗	鳩	神
目	耳	靴	足	口	齒	臍	洩
死	産	詩	韻	巴	触	汚	溺

“可視態の不可避の様式。少なくともそれ、それ以上ではないにしても、おれの目を通しての思考。万物の署名をおれはここで読み取る” (U-Y 3. 73)

Episode 4: Calypso

猫	肉	食	臓	糞	便	紙	読
牛	乳	血	環	尻	肥	秘	隠
朝	鐘	金	猶	緩	庭	夫	妻
陽	絵	会	魂	出	鍵	矢	閨

“リアポウルド・ブルーム氏は禽獣の臓物をうまがる男である。どろっとしたもつがらスープもいいし、こりこりする砂肝、詰め物をして焼いた心臓....” (U-Y 1. 11)

Episode 5: Lotus Eaters

郵	喪	花	茶	東	屍	温	浮
酔	香	水	植	歩	帽	光	沈
紙	聖	性	馬	猫	薬	歌	浴
式	棒	車	喫	煙	石	賭	体

“荷台車の連なるサー・ジョン・ロジャースン船寄せ通りをブルーム氏は粛々と歩いた。ウィンドウミル小路を過ぎ、リークス亜麻仁加工所、郵便電報局を過ぎる...” (U-Y 5. 127)

Episode 6: Hades

肉	血	骨	土	体	臓	心	爪
牛	馬	蹄	犬	鼠	蛆	花	草
屠	回	揺	埋	腐	解	交	流
列	噂	車	父	食	黒	帽	雨

“マーティン・カニンガムが、まず先に、シルクハットの頭をギッターと軋む馬車の中へ差し入れ、するりと乗り込んで席におさまった...” (U-Y 6. 155)

Episode 7: Aeolus

風	機	音	輪	山	詩	煙	教
電	話	止	転	塔	種	弁	学
肺	騒	馬	車	回	鍵	逆	空
心	血	鉄	樽	像	交	字	?

“ネルソン記念柱の前で路面電車は徐行し、待避線に入り、トロリーポールの移動をすませ、そうして発車する。ブラックロック、キングズタウン、ドーキー行き...” (U-Y 7. 203)

Episode 8: Lestrygonians

食	吐	齒	臭	鼻	業	環	水
視	盲	口	痛	血	蠅	輪	流
飢	鷓	疫	牛	肉	交	唇	穴
触	臆	汚	屠	骨	想	時	門

“パイナップル氷砂糖、レモン棒飴、バター飴玉。粗目糖顔の娘がクリスチャン・ブラザースの男にせっせとクリームボンボンを掬っている。小学校のお楽しみ会だろか。ぽんぽんによくないよ。...” (U-Y 8. 261)

Episode 9: Scylla and Charybdis

門	談	光	魂	震	鷹	墜	巴
間	論	神	知	靈	鳧	S	己
聞	語	幕	戲	劇	父	子	牛
問	説	床	翁	狂	讐	志	遺

“慇懃に、場を和めるべく、篤震の図書館長が喉ふるわせた。
—それにウィルヘルム・マイスターのあの貴重な一節もあるわけだから。偉大な詩人が偉大な同胞詩人を論じている。逡巡する魂が、葛藤する疑念に引裂かれつつ、苦難の海に立ち向かう。” (U-Y 9. 315)

Episode 10: Wandering Rocks

督	行	合	輪	馬	錢	刻	父
列	多	対	回	鳥	弧	落	交
門	路	像	橋	瀉	窓	泥	海
扉	面	鏡	鍋	煮	乞	貧	貝

修道院長イエズス会士ジョン・コンミー師は、てかてかの懐中時計を内ポケットに戻しながら、司祭館の階段を下りた。三時五分前。アーティンまで歩いていくにはちょうどいい。ええ、あのこの名前は何といった？ ディグナム。そう。真にふさわしく義しきかな。

(U-Y 10. 373)

Episode 11: Siren

歌	音	色	金	銅	馬	人	食
杖	叉	鍵	聾	禿	鱈	魚	酒
調	鳴	唱	奏	笑	揺	聴	煙
海	潮	波	漣	貝	鈴	耳	屁

青銅と金の漣が蹄を聞いた、銅鳴りを。

こなまこしゃくしゃくしゃくしゃ

ふあらら、ごつい親指爪からつまんで剥がしてふあらら、ふあらら。(U-Y 11. 433)

Episode 12: Cyclops

丨	目	棹	酒	我	俺	通	発
一	眼	棒	憎	戦	畜	獣	犬
+	愛	火	猶	死	生	追	伝
磔	罰	列	人	名	靈	群	云

ダブリン市警のトロイ爺公とアーバー坂の角んところでちょっと立話をしていたら畜生ッ煙突掃除め通りすがりに危うく俺の目ん玉へ道具を突っ込みそうにしやがった。

(U-Y 12. 497)

Episode 13: Nausicaa

夢	飾	脚	誘	惑	立	離	帰
見	視	手	淫	奮	勃	放	萎
女	男	双	子	鳥	蜂	蝙	終
青	夕	暮	砂	浜	岩	魅	了

夏の夕暮れはその神秘的な腕に世界を抱擁しはじめていました。遙か西のかたに太陽は傾き、つかの間につるいゆく一日の名ごりの夕映えが立ち去りかねて、いとおしげに残照を投げかけています。(U-Δ 13. 497)

Episode 14:Oxen of the Sun

有	子	三	殺	獸	蹄	肉	輸
無	宮	九	生	牛	角	輪	出
産	難	苦	痛	馬	管	会	入
雨	雷	雲	鳴	鶴	声	合	繁

南行保里為佐。南行保里為佐。南行保里為佐。

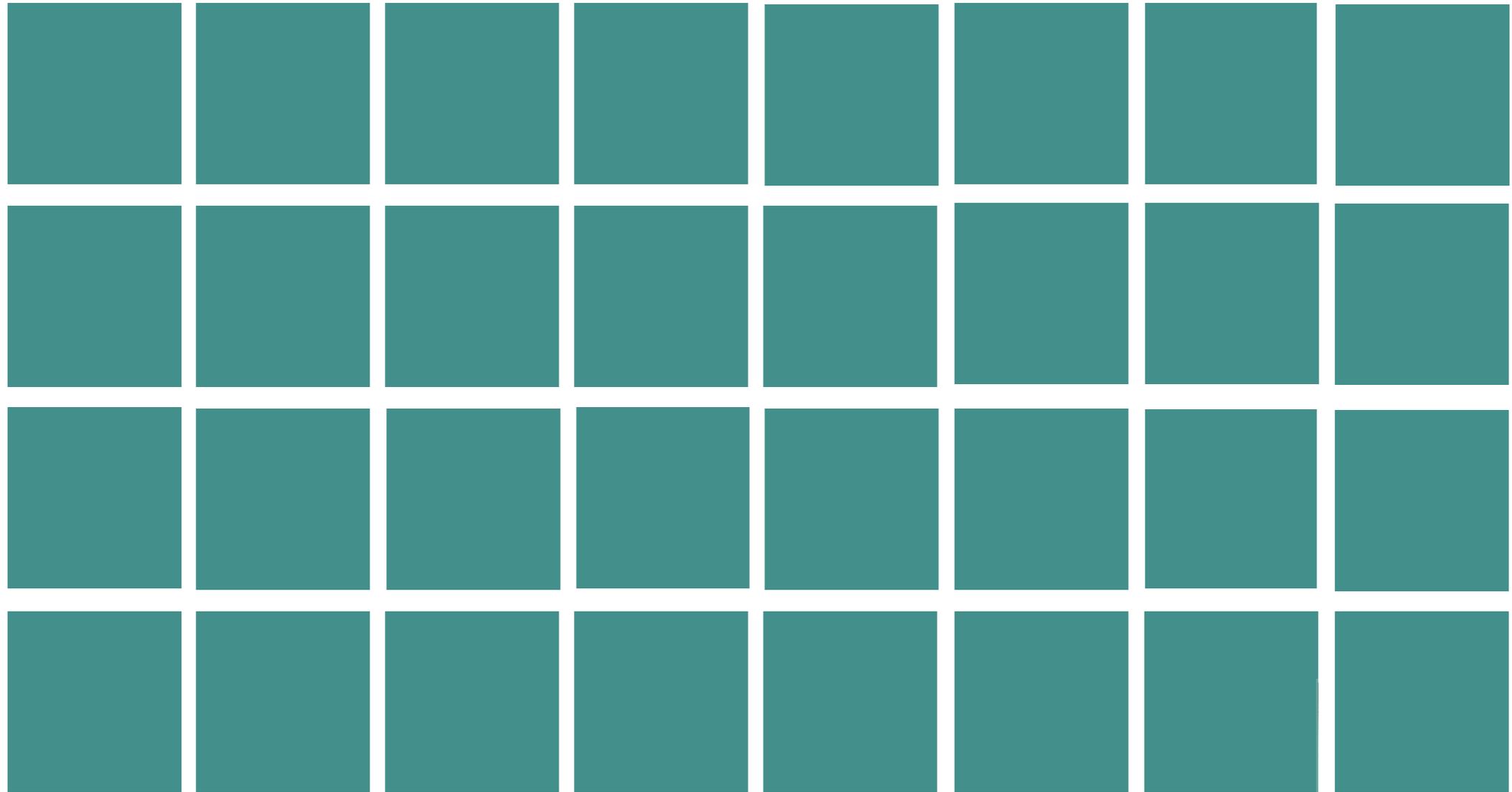
いざ賜へ、光の神、日の神、角々先生様、胎動所管と胎の実を。いざ賜へ、光の神、日の神、角々先生様、胎動所管と胎の実を。(U-Δ 14.13)

Episode 15: Circe

夜	幻	灯	杖	無	冠	豚	肉
魔	夢	戯	鏡	色	帽	犬	靈
窟	無	画	面	淫	扇	父	子
屈	掘	穴	妖	艶	鞭	母	死

マボット通りの町の入口。その前に、丸石舗装なしで、むき出しのままの軌道を敷いた電車の側線が延びる。赤や緑の鬼火めいた光と危険信号。ドアをあけ放したままの薄っぺらな家並。淡い虹いろの光を扇形にひろげるまばらな街灯 (U-Δ 15.105)

Episode 16: Eumaeus



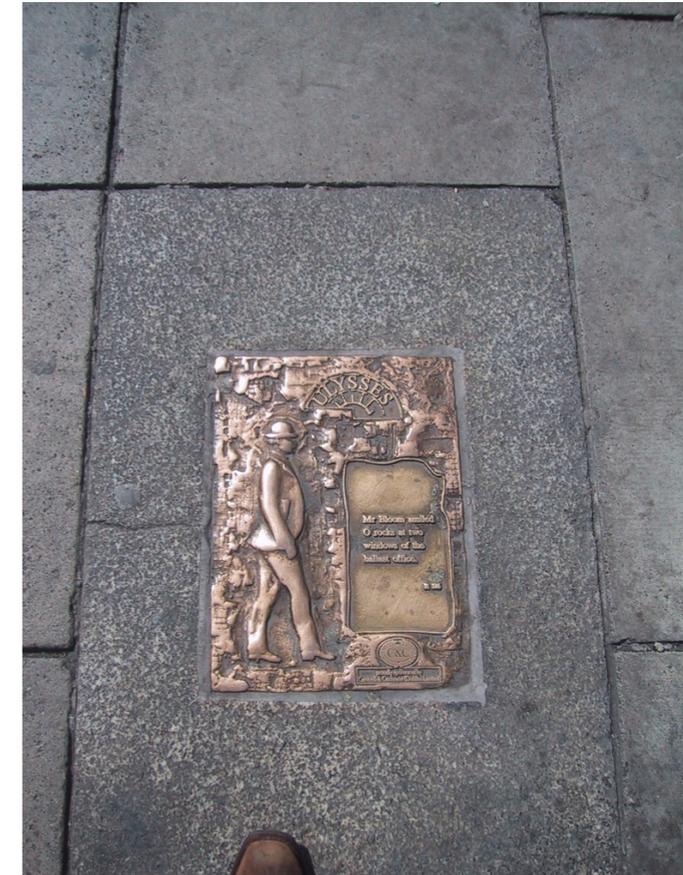
何はさておきミスタ・ブルームはスティーヴンの服に付着した鈎と屑の大部分を払い落とし帽子とトネリコのステッキを手渡したのち正統派サマリア人の親切さで何くれとなく彼を励ましたのであるが、たしかにこの激励は彼にとって必要不可欠であった。(U-Δ16.13)

(1) 読めない『ユリシーズ』の読み方

- 「『ユリシーズ』を読むことはできない。できるのは再読することだけだ」 (Joseph Frank, "Spatial Form in Modern Literature: An Essay in Two Parts," *Sewanee Review*, Vol. 53, No. 2 (Spring, 1945), pp. 234-35.)
- 「... 蜜蜂が蜜を求めるときに、豊かに繁茂する他の植物相には目もくれず、ある特定の花をめがけて飛んでいくのにも似て、『ユリシーズ』の読者は1本の道を横断しながら、テキストの外に積みあげられた膨大な資料の山の上をぶんぶんと飛び回り、使える情報源となる知の栄養を探し求める。」 (Rachel Murray, "Beelines: Joyce's Apian Aesthetics," *Humanities*, vol. 6, no. 42 (2017), p. 2.)
- 「『ユリシーズ』は、普通の人々が毎日送っている生活の現実を祝福するために書かれた。ボードレールからフローベールに至るまで、前世紀の最も力強い作品は、単に陳腐になってしまう都市の日課の反復性に対する著述家の公然たる抵抗が動機となって、日常生活への辛辣な批評を含んでいることが多い... ジョイスは全く異なる方法を取った。たった一日の詳細を記録することで、平凡な生活に潜む驚異的な要素を解き放つことができ、ありふれたものが驚嘆すべきものになると信じていたのである。」 (デクラン・カイバード『ユリシーズと我ら—日常生活の芸術』坂内正訳、水声社、2011年, p24)

(1) 読めない『ユリシーズ』の読み方

- ① ページ上を自由に飛び回って、好きな意味を集める。一度で理解しようとせず、最初は「？」出し。ほとんどすべての語は差異を伴った反復を通じて、別の語やモチーフと接続される。
- ② 各挿話の読み方は、挿話のなかで自己言及的に指示・説明されている。とりわけ冒頭部の文は当該の挿話が試みようとするもののトピックセンテンスになっている。
- ③ ダブリン行きを楽しみにする！〈ジョイスのダブリン〉と〈失われたダブリン〉を見つける巡礼の旅。
- ④ 「小さな一つ」に情熱を注ぐ。一語に隠された意味の探索と日常的な些事の評価。
- ⑤ 読書が中断しても、それを「挫折」と捉えない挿話単位で「読み終わった」とすればいい。
- ⑥ 『ユリシーズ』は「1人で1冊を1回だけ読む」という読書スタイルと相性が悪い。誰かと一緒に、何度も読む。
- ⑦ 読者個人の生と現代と結びつけてOK。日常的な生を営む「生活者」として読む。



(1) 読めない『ユリシーズ』の読み方

- 「『ユリシーズ』が読めない」読者は、ページ上の言葉を受動的に消費しているだけの読者。みずから意味の生成にコミットする必要がある。
- 『ユリシーズ』の内部には、読者の読む行為を原動力として動きはじめ、その都度新しい意味と諸関係を再組織化する、自律的な生を備えたネットワークが存在している。
- 『ユリシーズ』の面白さの一つは、関係の希薄であったものがとつぜん電撃的に繋がれる瞬間の読みの快楽にある。ほとんどすべての語に、いずれどこかに繋がれる何か期待できる。



(2) 第16挿話あらすじ



図2 "loop line," 1890, *South Dublin County Libraries* ; "Postcard with a photo of the Custom House Dublin and a steamer moored alongside the quay. An advertisement for Clyde Shipping is visible as well as the railway loop line and Butt Bridge with its swinging centre to facilitate shipping traffic. Guinness barrels and horse and carts are visible on the quayside." (<https://hdl.handle.net/10599/9714>)

(3) 特殊にして特殊ではない文体—第16挿話に関する評価

Preparatory to anything else Mr Bloom brushed off the greater bulk of the shavings and handed Stephen the hat and ashplant and bucked him up generally in orthodox Samaritan fashion which he very badly needed. His (Stephen's) mind was not exactly what you would call wandering but a bit unsteady and on his expressed desire for some beverage to drink Mr Bloom in view of the hour it was and there being no pump of Vartry water available for their ablutions let alone drinking purposes hit upon an expedient by suggesting, off the reel, the propriety of the cabman's shelter, as it was called, hardly a stonethrow away near Butt bridge where they might hit upon some drinkables in the shape of a milk and soda or a to mineral. (U 16.1-11)

「何はさておきミスタ・ブルームはスティーヴンの服に付着した鉤屑の大部分を払い落とし帽子とトネリコのステッキを手渡したのち正統派サマリア人の親切さで何くれとなく彼を励ましたのであるが、たしかにこの激励は彼にとって必要不可欠であった。彼(スティーヴン)の精神状態は錯乱とは言わぬまでもいささか不安定で何らかの飲料をしきりに要求しておりミスタ・ブルームとしてはすでに時間が遅すぎるうえ飲料はおろか手洗い用のヴァルトリ水道の蛇口すら見あたらず状況にかんがみ、窮余の一策として咄嗟に提案したのは、ほとんど一投石の距離にあるバット橋そば通称駅者溜りなる店まで行けばミルクソーダにせよミネラルウォーターにせよとにかく何らかの飲料にありつけはせぬか。」 (U-Δ 16.13)

(3) 特殊にして特殊ではない文体—第16挿話に関する評価

- 「疲れた男」の言葉で書かれているとされてきた。(Budgen 225, Stuart Gilbert (in a letter to Ellmann), Ellmann 362,)
- 『ユリシーズ』のなかでも評判が悪く、失敗している挿話、読者の眠けを誘う、退屈な挿話であるとされてきたが、特にKenner以降、その入念な語りの仕掛けユーモア性、ベケット、ナボコフへの影響を通じて再評価されている。(Kenner 130; Breuer 88; Brook Thomas, 15)
- マーフィーや語り手の正体に関する諸説 (マーフィー=モリーのかつての恋人説、ジョイス説、語り手=ヘンリー・フラワー説...)
- 機知に富んだ文体であろうとして失敗するダブリンのジャーナリズムを模倣している (Stanislaus's letter to Joyce, 26 February 1922, *Letters III* 58; Kenner 131)
- 疲れているのは登場人物というより、幾度も使われて疲弊した言葉 (Karen Lawrence, 1981, 168; Karen, 1992, 362).
- 第1挿話のステイヴンのハンカチ、第2挿話の口蹄疫の記事、第3挿話のローズヴィーン号、第6挿話の葬儀、第7挿話における噂話やクリシェの使用、第15挿話のブルームの尻ポケットのボタン...等々、「細部」との繋がり。

(3) 特殊にして特殊ではない文体—第16挿話に関する評価

- “Make it new”の標語を掲げるパウンドあるいは冰山理論を備えたヘミングウェイ等のモダニスト的文体とは正反対に、第16挿話のスタイルは冗長にして無駄が多く、陳腐なクリシェに依存する模倣的。
- “The rhetorical hallmark of ‘Eumaeus’ is a dissonant mixture of slang, attempted witticisms, would-be elegant and educated expressions, a vast number of idioms and formulas that have become trite, and sclerotic cliches, as well as countless verbosities, redundancies, linguistic stuffings, and puffed-up phrases.” (Breuer 88)
- Horst Breuerの分類による第16挿話の4つの特徴
 - (1) Slang and Witticism
 - (2) Pretensions to Elegance and Education, Use of Foreign Expressions, Stilistic Variations
 - (3) Cliches and Idiom
 - (4) Inflated Language, Redundancy

(3) 特殊にして特殊ではない文体—Breuerの分類による第16挿話の4つの特徴

(2) Pretensions to Elegance and Education

①教養を見せつけるような外来語を多用する

“finis,” “demimonde,” “confreres,” “quondam,” “qui vive,” “rara avis,” “raconteur,” “postmortem,” “bona fides,” “apropos,” “venue,” “coup d’ceil,” “entre nous,” “soi disant,” “instanter,” “paterfamilias,” “in toto,” “sine qua non,” “sotto voce,” “de rigueur,” “au fait,” “penchant,” “entree,” “conversaciones,” and “genus omne” (Breuer 93-94)

②ありふれた伝達部の動詞say, ask, anwerの代わりに、ニュアンスに富んだ多彩な表現を用いる。

→ “commented,” “pursued,” “replied,” “added,” “remarked,” “observed,” “queried,” “responded,” “ejaculated,” “returned,” “ventured to throw out,” “concurrred,” “rejoined,” “confided,” “continued,” “inquired,” “related,” “interrogated,” “explained,” “sighed,” “expostulated,” “objected,” “urged,” “interposed with,” “dittoed” (!), “acceded,” “retaliated,” “retorted,” “corroborated,” “proceeded to stipulate,” “assented,” “agreed,” “imparted,” “hastened to affirm,” “insinuated,” “interrupted,” “intimated,” “questioned,” “exclaimed,” “suggested,” “assured,” “counselled,” and “parenthesised” (Breuer 94, see also Thomas 16-17)

③登場人物を多様な属性をつけて表現する。

D. B. Murphy → “red bearded bibulous individual,” “communicative tarpaulin,” “doughty narrator,” “wily old customer,” “old seadog,” “Skibbereen father,” “[t]hat worthy,” “ancient mariner,” “friend Sinbad,” “Shipahoy,” “redoubtable specimen,” “impervious navigator,” “rough diamond,” “Jack Tar,” “merry old soul,” “that equivocal character,” “seafarer, and “oilskin” (Breuer 94)

(3) 特殊にして特殊ではない文体—Breuerの分類による第16挿話の4つの特徴

(4) Inflated Language, Redundancy

① なくともよい無用な挿入句

“for every contingency,” “of any description,” “of its kind,” “at all events,” “as well he might have,” “for all intents and purposes,” “a born raconteur if ever there was one,” “in all probability,” “pure and simple,” “by the way,” “as the case might be,” “in its way,” “so far as he was personally concerned,” “that is to say,” “not by any manner of means,” “their respective ages,” “beyond yea or nay,” “when all was said and done,” “by the by,” “in his own small way,” “beyond a shadow of a doubt,” and “to a slight extent” (Breuer 96)

② みずからの語彙・表現に対する自己言及性

“to vary the timehonoured adage,” “not to put too fine a point on it,” “so to speak,” “figuratively speaking,” “suffice it to say,” “in classical idiom,” and “as the adage has it” (Breuer 96)

③ 冗語 (pleonasms)、余剰性 (redundancy)

“some beverage to drink,” “in an audible tone of voice,” “the vulnerable point of Achilles,” “the grizzled old veteran,” “Mr Bloom thoroughly agreed, entirely endorsing the remark,” “man or men in the plural,” “their facial expressions,” and “they unquestionably had an insatiable hankering after” (Breuer 96)

→紙数の都合に左右されず、反復と冗語を弄する事の自由を謳歌し、余剰と物量を楽しむ、倦みと疲れを知らぬ語り手。

(3) 特殊にして特殊ではない文体—反復は本当につまらない？

- 「しかもちょうどそのとき誰かが叩き落したパーネルのシルクハットを拾って手渡してあげたら彼は落ち着きはらった顔でサンキューと言った。」 (U-Δ 16.95)



- (パーネル)のシルクハットが不意に吹っ飛ばされたとき、それを目撃して人ごみのなかで拾って返そうとした(そして実際に自にもとまらぬ早業で返してのけた)人物は、正確な歴史的事実としてブルームその人であったし、帽子なしで喘いでいたあの人の思いはあのときおそらく帽子とは何マイルも離れたところにあつたろう、何しろ国の繁栄にあずかる大地主の家に生まれた紳士であるから、実のところああして故国に一身を献げたのは何よりもまず名誉のためであるし、幼少のころ母の膝から伝えられ骨にしみこんだ礼節があのと時咄嗟に現れ、帽子を差し出した男のほうに向きなおって《サンキュー・サー》と、《沈着》そのもののあの声は、今朝がたおれが帽子がへこんでるよと注意してやったあの法曹界の花形あたりとはまるで格調が違うわけで、歴史は繰り返しながらも確実に変化している (history repeating itself with a difference)。(U-Δ16.105-06)

(3) 特殊にして特殊ではない文体—反復は本当につまらない？

- 帽子を差し出した男のほうに向きなおって 《サンキュー・サー》と、《沈着》そのもののあの声は、今朝がたおれが帽子がへこんでるよと注意してやったあの法曹界の花形あたりとはまるで格調が違うわけで、歴史は繰り返しながらも確実に変化している。 (U-Δ16.105-06)

John Henry Menton took off his hat, bulged out the dinge and smoothed the nap with care on his coatsleeve. He clapped the hat on his head again.

—It's all right now, Martin Cunningham said.

John Henry Menton jerked his head down in acknowledgment.

—Thank you, he said shortly.

They walked on towards the gates. Mr Bloom, chapfallen, drew behind a few paces so as not to overhear. Martin laying down the law. Martin could wind a sappyhead like that round his little finger, without his seeing it.

Oyster eyes. Never mind. Be sorry after perhaps when it dawns on him. Get the pull over him that way.

Thank you. How grand we are this morning!

※U 6.1021-1033：第6挿話の終わり、ブルームがジョン・ヘンリー・メントンの帽子の凹みを注意した場面

(3) 特殊にして特殊ではない文体—反復は本当につまらない？

「複写」 (“Counterparts”) におけるファリントンの写しにおける“sir”の削除

(上司アリン氏に実際に言った言葉)

“—I don't think, **sir**, he said, that that's a fair question to put to me”

(“Counterparts” 170-71)

↓

(デイヴィー・バーンで仲間に披瀝される武勇伝のなかの言葉)

“—I don't think that that's a fair question to put to me, says I.”)

(“Counterparts” 230-31)

→ファリントンは「複写」に失敗し、不忠実な写しをつくったとされてきたが、一言一句「原本」と同じ再現を求めることは、どこまで妥当な解釈行為だろうか。現実的な酒場の風景を思い浮かべれば、飲み仲間には痛快な話や自分の武勇伝を聞かせる時には、話の効果に結びつかない要素を削除したり、誇張を加えるといった編集行為はごく「自然な」こと。職場で要求される機械的な同一性の再現業務と対比すれば、彼がパブで行なった不忠実な写しはいわば「人間らしい」行為。

(5) 食品偽装と混ぜもの問題 (adulteration) について

「この《新密な内輪話》の最中に溜りの主人はテーブルの上に、極上調製飲料なる レッテル付きのコーヒー (a choice concoction labelled coffee) の熱いのをなみなみ一杯と、いささかならず古めかしい甘パンのごときものを置いたあとで、そそくさとカウンターのほうに引きさがつた。ミスタ・ブルームはあとで彼を入念に観察してやろう、じろじろ見てるとは見えないようにと心に決めて.....その目的を果すために、とにかく話をつづけようよとステイヴンに目くばせしながら、いまのところはまだコーヒーと呼べそうな液体のカップを恭しい手つきで徐々に彼のほうへと押しやったのである。」

(U-Δ16. 33)

IS YOUR FOOD ADULTERATED.

A very interesting article appears in the February *Pearson's Magazine* entitled "Simple Tests for Food Frauds." It explains in a concise and practical manner some simple tests which enable us to ascertain whether our daily food is being adulterated. Some excellent photographs illustrate the article, showing how to apply the various tests. "Milk, butter, jam, coffee, tea, bread in fact, all the necessaries of life—are adulterated, while eggs are constantly being sold as new-laid when they are really imported eggs laid, possibly, weeks before. To test the quality of an egg, hold it in front of a candle in a dark room. A new-laid egg will show an air space at the top. In an egg still fresh but not quite new laid, this space will be filled up. A bad egg presents a curious patchy appearance. "To test the quality of bread, take two pieces of equal weight, and bake for half an hour. The better sample is that which then weighs the heavier." Jam is very often adulterated with various dyes. This is an easily applied method of testing it. Mix some of the suspected jam with an equal quantity of warm water, place a piece of wool in the mixture, and boil for half an hour. Then wash the wool thoroughly. If the stain washes out, the jam is pure; if it will not wash out, the jam contains a chemical dye. "Impure coffee, when put into water, quickly discolours it, and a sediment forms at the bottom of the glass. Pure coffee, on the other hand, floats for some time, and does not discolour the water." The article should certainly be read and digested by thrifty housewives. The cheapest article is often the dearest in the long run; especially is this the case when that article happens to be cheap food containing harmful adulterants.

"Is Your Food Adulterated?"
The Irish Times, February 10,
1912, p. 18.

(5) 食品偽装と混ぜもの問題 (adulteration) について

18世紀にはほとんど例が見られなかったが、19世紀前半以降、生産者と消費者の距離が拡大し小売店が増加したこと、自由競争の活発化と国家の控えめな介入、また明文化されたレシピの流通を主要な原因として、混ぜもの工作が広く見られるようになった (Rowlinson 63-64)。ドイツの化学者による告発本『食品への混ぜもの工作と料理に含まれる毒について』(1820) は大きな反響を呼んだ (グッドマン, 165)。

混ぜものは、卵や牛乳、バター等の乳製品、コーヒー・紅茶等の嗜好品、子供たちも食べる砂糖菓子食品、パンやジャム等を含めた日々の生活の必需品に認められ、増量・風味や色味の調整、賞味期限のごまかしのために、多種多様な植物、化学薬品や染料、白亜やミョウバンなどの鉱物、石膏、石や砂利、鉛などが混ぜられた。消化不良の原因や死亡例が生じたことにより消費者が警戒するようになると、「混ぜもののない」という意味で「純粋な」(pure) という形容詞が広告的惹句として使われることになる。



“The Great Lozenge-Maker. A Hint to Paterfamilias.” Punch, 20 Nov. 1858, London.

(5) 食品偽装と混ぜもの問題 (adulteration) について

Pineapple rock, lemon platt, butter scotch. A sugarsticky girl shovelling scoopfuls of creams for a christian brother. Some school treat. **Bad for their tummies.** **Lozenge** and comfit manufacturer to His Majesty the King. (U8.1-4)

「パイナップル味の棒飴、レモン入りキャンディ、バタースコッチ。砂糖菓子のように甘ったるい女の子がド・ラ・サール会の平修士に大匙で何杯もクリーム菓子をすくって入れてやる。学校のおやつにするんだな。子供の胃に悪い。国王陛下御用達薬用ドロップおよび糖菓製造業。」 (U-Δ 8.371)



“The Great Lozenge-Maker. A Hint to Paterfamilias.” Punch, 20 Nov. 1858, London.

(5) 食品偽装と混ぜもの問題 (adulteration) について

Lord knows what concoction. Cauls mouldy
tripes windpipes faked and minced up.
Puzzle find the meat. . . . Peace and war
depend on some fellow's digestion. Religions.
Christmas turkeys and geese. Slaughter of
innocents. Eat drink and be merry. Then
casual wards full after. Heads bandaged.
Cheese digests all but itself. Mity cheese.
...Pure olive oil. Milly served me that cutlet
with a sprig of parsley. Take one Spanish
onion. God made food, the devil the cooks.
Devilled crab. (U 8.749-62)

「どんな混ぜ肉を使っているかわかったもん
じゃない。羊膜、かびの生えた肺臓、気管、
細かく刻んで適当に作る。肉なんてどこにあ
るのやら。」 (U-Δ 8.420)

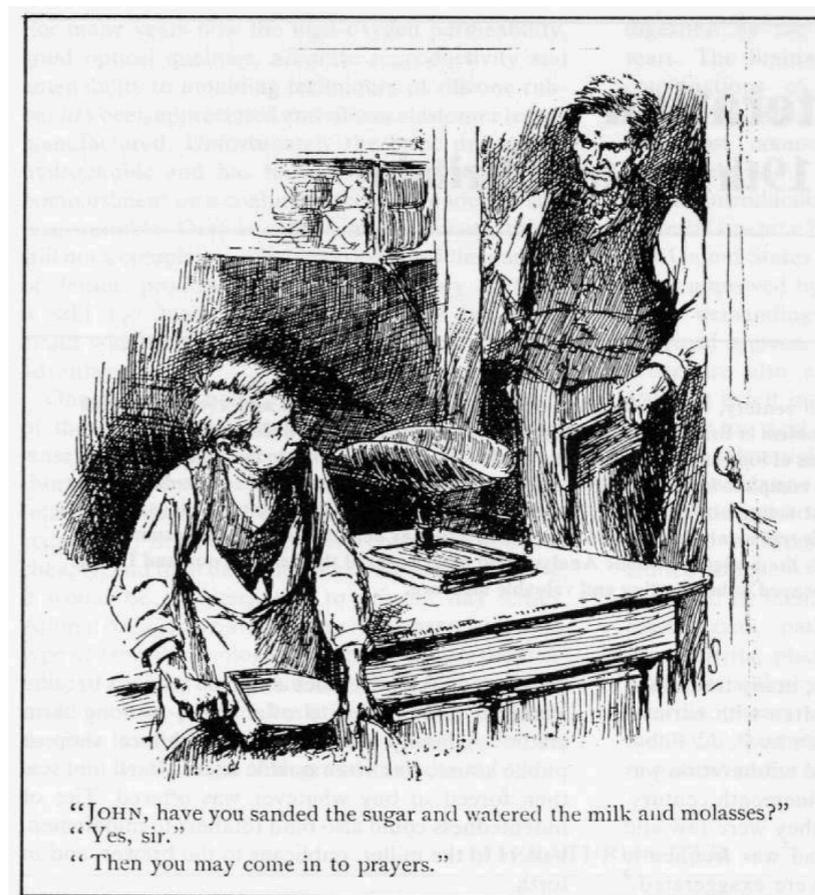


Image from Rowlinson, p. 64, “The respectability of food adulteration,” from *The Picture Magazine*, London, 1893, p. 64

(5) 食品の混ぜものと言語のごた混ぜ

“The rhetorical hallmark of ‘Eumaeus’ is a dissonant mixture of slang, attempted witticisms, would-be elegant and educated expressions, a vast number of idioms and formulas that have become trite, and sclerotic cliches, as well as countless verbo­sities, redundancies, linguistic stuffings, and puffed-up phrases.” (Breuer 88)

(5) 食品の混ぜものと言語のごた混ぜ

- “The rhetorical hallmark of ‘Eumaeus’ is a dissonant mixture of slang, attempted witticisms, would-be elegant and educated expressions, a vast number of idioms and formulas that have become trite, and sclerotic cliches, as well as countless verbosities, redundancies, linguistic stuffings, and puffed-up phrases.” (Breuer 88)

→第16挿話が食品偽装と混ぜものの問題を含めていることは不思議ではない。ジョイスは意図的に言語上のadulterantsを散りばめ、それを「不純な」ものとみせかけている。

→では「純粋な」言語とは？ 譲歩句や挿入句、外来語、嘘や誇張、修辞はすべて不純なもの？

引用・参考文献

- Budgen, Frank. *James Joyce and the Making of Ulysses and Other Writing*. Oxford UP, 1972.
- Horst Breuer, "Henry Flower Writes a Story," *James Joyce Quarterly*, vol. 47, no. 1 (Fall 2009), pp. 87-105
- Joyce, James. *Letters of James Joyce*. 3 vols. Edited by Stuart Gilbert (I), and Richard Ellmann (II, III), Viking P, 1966. [Respectively LI, LII, and LIII]
- Dubliners: Authoritative Text, Context, Criticism*. Edited by Margot Norris, W.W. Norton & Company, 2006.
- Lawrence, Karen. *The Odyssey of Style in "Ulysses."* Princeton UP, 1981.
- . "'Beggaring Description': Politics and Style in Joyce's Eumaeus." *Modern Fiction Studies*, vol. 38, no. 2 (Summer 1992), pp. 355- 76.
- Maddox, James. "'Eumaeus' and the Theme of Return in Ulysses." *Texas Studies in Literature and Language*, vol. 16, no. 1 (Spring 1974), pp. 211-20
- Rowlinson, P. J. "Food Adulteration: Its Control in 19th Century Britain," *Interdisciplinary Science Reviews*, vol. 7, no. 1, 1982 pp. 63-72,
- Thomas, Brook. "The Counterfeit Style of 'Eumaeus'," *James Joyce Quarterly*, Vol. 14, No. 1 (Fall, 1976), pp. 15-24.
- ルース・グッドマン『ヴィクトリア朝英国人の日常生活——貴族から労働者階級まで』小林由香訳（原書房, 2017年）
- 田村章「『エウマイオス挿話』をめぐる『ファクト』と『フィクション』」、『百年目の「ユリシーズ」』下楠昌哉・須川いずみ・田村章編著、松籟社、351-68頁。

次回第17回読書会について

次回の第17回読書会（第17挿話：イタケ）は2022年4月24（日）にオンラインで実施します。予約開始日はtwitter（@YMINAMITANI）とStephens Workshopのホームページでお知らせします。ご登録の際は、携帯アドレスではなく、Webメールでのご登録をお願いいたします。

後ほどアンケートフォームを別途送付しますので、今回のご感想・改善点について教えていただけると幸いです。

本日はご参加いただき、ありがとうございました。

刊行100周年特別企画 ジェイムズ・ジョイス『ユリシース』への招待

22 ULYSSES

JAMES JOYCE

1882-1941

Image: https://commons.wikimedia.org/wiki/File:James_Joyce_textorized.png

22人のジェイムズ・ジョイス研究者の講師による、
『ユリシース』(1922)第1挿話から第18挿話の謎と魅力を徹底解説

2月2日を初回とし、2022年の1年間で全22回オンラインにて開催（参加無料）

開催日程：毎月第1、第3金曜 20:00～22:00 全22回 (@Zoom)



《発起人》

田多良俊樹、河原真也、桃尾美佳、小野瀬宗一郎、南谷奉良、小林広直、
田中恵理、平繁佳織、永嶋友、今関裕太、宮原駿、湯田かよこ、新井智也

Design: Ikeda Satoe

ULYSSES

第3回 3月4日(金曜日)

- | | |
|-------------|--------------------------------------|
| 20:00-20:10 | ご挨拶
司会：田多良俊樹・南谷奉良 |
| 20:10-20:40 | [第1部]
第2挿話一階級、教育、植民地性
講師：田多良俊樹 |
| 20:40-20:50 | 休憩 |
| 20:50-21:30 | [第2部]
歴史は悪夢か？
講師：吉川信 |
| 21:30-21:55 | 質疑応答 |
| 21:55-22:00 | 次回案内 |